

令和元年6月8日現在

機関番号：32615

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2018

課題番号：15K02695

研究課題名(和文) 聞き手の役割に主眼を置いた英語会話能力育成モデルの構築

研究課題名(英文) Constructing a Pedagogical Model for English Conversation: Focusing on the Role of the Listener

研究代表者

岩田 祐子 (Iwata, Yuko)

国際基督教大学・教養学部・教授

研究者番号：50147154

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：英語会話の聞き手の言語行動の特徴は、「非語彙的あいづちだけでなく語彙的あいづちをうつ」「コメントを言う」「話し手に質問する」「話し手の話に関連する話を語る」などである。本研究では、英語会話において使われているストラテジーを解明し、解明したストラテジーのそれぞれをどう教えていくのか、指導法と教材を作成した。作成した指導法や教材を使って実際に研究代表者と研究分担者がそれぞれの大学で学生を教えて効果の検証を行った。その結果、日本語母語話者にわかりやすく段階を追ってストラテジーを提示し、明示的に教えれば、ストラテジーの習得は可能であり、それが日本語母語話者の英語力向上につながる事が明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまでの日本の英語スピーキング指導において欠けていた、聞き手の役割を教える重要性を指摘し、方法論を提示した。日本語母語話者が英語会話に積極的に参加するためには、話し手として積極的に話すだけでは不十分であり、英語会話の聞き手として期待されている役割を行い、話し手と一緒に会話を発展させることが必要である。英語会話データの分析し、英語会話に参加するために聞き手として必要なストラテジーを解明し、ストラテジーを教えるための教材と指導法を考案した。日本語母語話者にわかりやすく段階を追ってこれらのストラテジーを提示し、明示的に教えれば、習得は可能であり、それが英語会話力向上につながることを示した。

研究成果の概要(英文)：The role of the listener in an English conversation seems to be different from that of the listener in a Japanese conversation. The listener in an English conversation tends to be more actively involved in the conversation by using various strategies such as giving lexical back-channels, making comments on the speaker's talk, asking questions to elicit more information and telling a related story. As a result, the listener in an English conversation elaborates on the topic with the speaker. The purpose of this study was to investigate the role of the listener in English conversations and design teaching methodology and teaching materials to help students to acquire the above strategies so that they could actively participate in English conversations. The Japanese students demonstrated that they were able to be more actively involved in English conversations after they were taught to use the above strategies. Explicit teaching of listener strategies turns out to be very effective.

研究分野：英語教育

キーワード：英語会話力 聞き手の役割 あいづち 質問 コメント 関連ストーリー 指導法 教材

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

研究代表者と研究分担者は、以下の二つの科研費研究で、日本語と英語の初対面会話を 80 本収集し、英語会話と日本語会話の構造の比較、話し手と聞き手の役割や会話の進め方などを研究してきた。

まず、「国際語としての英語の語用指標解明と英語教育への応用 英会話ができる日本人の育成」(平成 22~24 年度科学研究費補助金(基盤研究(C)課題番号 22520595 研究代表者 津田早苗)では、日本語と英語(英・米・豪)の会話データの比較の中で、**日本語会話と英語会話では会話の進め方に大きな差が見られる**ことを解明した。特に「話題の展開方法」「質問の仕方」「質問への答え方」「自己開示」「応答(あいづち)と聞き返し」「会話の順番取りと発話量」において違いが明らかであった。

次の「日・英語の話題展開の手法: 円滑な英会話のための社会言語能力の育成に向けて」(平成 25~27 年度科学研究費補助金(基盤研究(C)課題番号 25370704 研究代表者 大谷麻美)では、上記の科研費による研究をさらに進め、英語会話における会話の進め方、話し手と聞き手の役割を日本語会話と比較しながら明らかにした。**英語会話と日本語会話において最も大きな違いは聞き手の言語行動である**ことがわかった。英語会話の聞き手は、話し手に**コメント**や**質問**をすることで話し手の話に関心を示し、情報提供を求める質問をすることで更なる情報の開示を求める。また話し手の意見に対し**反論**もする。またターンを取り話し手となって、**話し手の話に関連した内容を話し**、会話を発展させる。聞き手のこれらの言語行動が、話し手の話を発展させる。英語会話では聞き手も積極的に会話に参加し、**話し手と一緒に会話を作り上げる**。一方、日本語会話の聞き手はあいづちを打ちながら話し手の話を聞くというまさに「聞き手」としての役割を担う。話し手に質問もするが、相手からさらに情報を引き出すための質問ではなく、内容確認の質問が多いことが明らかになった(岩田 2014a, 2014b)

上記の研究では、日本語母語話者が英語母語話者と英語で話す異文化会話も収録し分析したが、**多くの日本語母語話者は聞き役にまわってしまい、会話に積極的に参加することができなかった**。参加した日本語母語話者はかなり英語力があつたが、英語母語話者の聞き手のように話し手に積極的に働きかけることはしていない。日本語会話の聞き手の役割をそのまま英語会話に持ち込んで聞き手にまわることが多かった。

上記二つの科研費研究からわかったことは、**日本語母語話者が英語会話に積極的に参加するためには、話し手として積極的に話すだけでは不十分であり、聞き手に期待されている役割を行い、話し手と一緒に会話を発展させることができなければいけない**ということである。そのためには、英語会話の聞き手が使っているストラテジーを習得する必要がある。たとえば、英語会話の聞き手が多用する「質問をする」という言語行動においても、どのタイミングでどういう種類や内容の質問をするのかなどによって様々なストラテジーが必要である。**それらのストラテジーをまず解明し、日本語母語話者にわかりやすく段階を追って提示し、明示的に教えれば、ストラテジーの習得は可能であり、それが日本語母語話者の英語力向上につながると考えた。**

2. 研究の目的

研究代表者がこれまで参加した科研費の研究の中で、英語会話の聞き手の言語行動の特徴は、下の図にあるように「非語彙的あいづちだけでなく語彙的あいづちをうつ」「コメントを言う」「話し手に質問する」「話し手の話に関連する話を語る」「反論する」などである。これらの特徴をさらに詳しく分析し、それぞれの言語行動において使われている

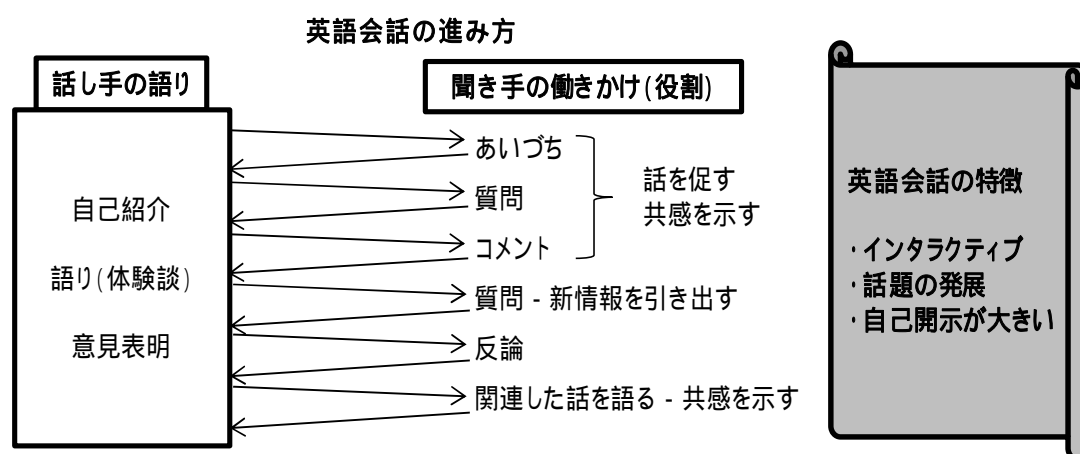
ストラテジーを解明する。またどのストラテジーがどこでどう組み合わせて使われているか、その機能も含め解明することを目的とした。

解明したストラテジーのそれぞれをどう教えていくのか、指導法と教材を作成する。たとえば、「質問をする」という言語行動があるが、質問の仕方も様々であり、「相手の言ったことを繰り返し、内容を確認する質問」もあれば、「相手から情報をもっと引き出すための質問」もある。どの場面でどういう質問をするのか、文構造と機能の両面から指導法と教材を考案することを目的とした。

作成した指導法や教材を使って実際に学生を教えて、効果の検証を行うことを目的とした。

学生からのフィードバックや教員の観察を参考に、指導法や教材の見直しを行う。**ストラテジーの解明 指導法立案と教材作成 パイロット授業 再分析・見直し**の四つがサイクルとなって、効果的な指導法や教材が確立するまで繰り返すことを目的とした。

指導法を考案し、教材を作成したら、**現職の教員を対象にワークショップを実施し、日本語母語話者が積極的に英会話に参加するために必要なストラテジーをどう教えるかのトレーニングを行う**ことを目的とした。



3. 研究の方法

平成27年度

1) 研究の手順

研究代表者が研究分担者として参加した前述の二つの科学研究費の研究成果から明らかになった英語会話の聞き手の言語行動をさらに詳しく分析し、**英会話に積極的に参加するために必要なストラテジーを解明した。**

これまでの科学研究で明らかになった英語会話における聞き手の言語行動は、(1)非語彙的あいづちだけではなく、語彙的あいづちをうつ、(2)コメントを言う、(3)情報確認の質問だけでなく、さらに情報を要求する質問をする、(4)話し手の意見に反論する、(5)話し手の話に関連した内容のことを話すなどであり、これらについてさらに詳しく分析した。

2) 中間報告を学会において発表

1年目は英語会話における聞き手の言語行動の分析について、ベルギーのアントワープで7月26日から31日まで開催された国際語用論学会 (IPrA) で発表した。

平成28年度

1) 研究の手順

平成27年度に解明したストラテジーそれぞれに対し、必要な**指導法を考案し、教材を作成した**。たとえば、英語会話の聞き手が頻繁に行う言語行動として「質問をする」があるが、質問の種類は多岐にわたる。話し手が言ったことの内容を確認する質問、確認のため相手の言ったことを文字通り繰り返す質問、話し手からさらに情報を引き出すための質問、相手の話に関心を示すための質問など様々な目的で質問がされる。これら多様な質問の仕方には難易度がある。やさしい質問の仕方から難しい質問まで、それぞれストラテジーが存在するので、それらのストラテジーをどの順番でどう教えていけばいいのか、質問が果たす効果は何かなどを学生に教える必要がある。そのために必要な指導法を考案し、教材を作成した。

2) パイロット授業

考案した指導法と作成した教材を使い、研究代表者及び研究分担者それぞれの大学で、**パイロット授業を行い、効果を観察した**。また学生からのフィードバックを収集した。学生からのフィードバックや参与観察に基づいて**指導法や教材の手直しを行った**。

3) 成果発表

中間報告として、Sociolinguistics Symposium 21 (University of Murcia)などで発表した。

平成29年度

1) ワークショップ

作成した指導法と教材を使って**現職教員のトレーニング・ワークショップ**を二回11月4日に東京工芸大学中野キャンパスで、12月2日に名城大学外国語学部で行った。参加した大学・高校教員に、英語母語話者が積極的に英語会話に参加するために使っているストラテジーを日本人学生にいかにか教えていくかを学んでもらうことを目的に行った。参加者からのフィードバックをもとに指導法と教材の検討を行った。

2) シンポジウム

研究成果を研究代表者と研究分担者で**指導法考案・教材作成について**の中間発表を、8月30日に青山学院大学で開催された大学英語教育学会(JACET)年次大会シンポジウム発表し、フィードバックをもらった。

3) 成果発表

研究の成果発表として、上記のワークショップとシンポジウム以外に、国内外の学会で発表した。発表した学会は、社会言語科学会、北アイルランドのBelfastで開催された国際語用論学会(IPrA)、などである。また成果発表をよりまとめるために1年延長を決めた。

平成30年度

1) 指導法と教材を使っての学生の指導の実施

改良した指導法と教材を使って学生を指導した。その後、日本人学生と留学生との英語会話を実施し、成果を検証した。

2) 成果発表

研究の成果発表として、国内外の学会で発表した。発表した学会は、ニュージーランドのオークランド大学で6月27日から30日まで開催されたSociolinguistics Symposium 22、11月24日から25日に横浜国立大学で開催された日本英語学会年次大会、2019年3月2日に名古屋工業大学で開催された大学英語教育学会中部支部春期定例研究会などである。

4. 研究成果

英語会話の聞き手の言語行動の特徴は、「非語彙的あいづちだけでなく語彙的あいづちをうつ」「コメントを言う」「話し手に質問する」「話し手の話に関連する話を語る」「反論する」などである。本研究では、これらの特徴をさらに詳しく分析し、**それぞれの言語行動において使われているストラテジーを解明した。またどのストラテジーがどこでどう組み合わせて使われているか、その機能も含め解明を試みた。**また、解明したストラテジーのそれぞれをどう教えていくのか、指導法と教材を作成した。たとえば、「質問をする」という言語行動があるが、質問の仕方も様々であり、「相手の言ったことを繰り返し、内容を確認する質問」もあれば、「相手から情報をもっと引き出すための質問」もある。どの場面でどのような質問をするのか、**文構造と機能の両面から指導法と教材を考案した。**

作成した指導法や教材を使って実際に研究代表者と研究分担者がそれぞれの大学で学生を教えて、効果の検証を行った。学生からのフィードバックや教員の観察を参考に、指導法や教材の見直しを行った。ストラテジーの解明 指導法立案と教材作成 パイロット授業 再分析・見直しの四つがサイクルとなって、効果的な指導法や教材が確立するまで繰り返した。その結果、日本語母語話者にわかりやすく段階を追ってストラテジーを提示し、**明示的に教えれば、ストラテジーの習得は可能であり、それが日本語母語話者の英語力向上につながるということがわかった。**指導した日本人学生には、指導後、留学生と英語会話を行ってもらったが、指導前と比べ、質量ともに英会話力が伸びていることがわかった。

また指導法を考案し、教材を作成したら、**現職の教員を対象にワークショップを実施し、日本語母語話者が積極的に英会話に参加するために必要なストラテジーをどう教えるかのトレーニングを行ったが、参加者からは大変好評であり、このような教員向けワークショップを今後開催する必要性を感じた。**

5. 主な発表論文等

- Iwata, Yuko 2019 “The Role of English Language Teaching for Liberal Arts Education in Non-English Speaking Countries” In Mikiko Nishimura & Toshiaki Sasao (eds.) *Doing Liberal Arts Education: The Global Case Studies* 75-89 Singapore: Springer
- Murata, Yasumi 2019 “The need for explicit teaching of interactional skills: Cultural Assumptions underlying English language interactions.” *Meijo University Journal of the Faculty of Foreign Studies* 2 33-65
- 大谷麻美 2019 「日本語初対面会話における話題導入の相互行為 プロセスと対人関係機能」京都女子大学人文論叢 67 1-27.
- 大塚容子 2019 「動画から「うなずきの半自動検出と談話研究への応用」『言語処理学会第25回年次大会発表論文集』868-871 (宇佐美まゆみ、伊藤敏との共著)
- 大谷麻美 2018 「日・英語の初対面会話における話題の連鎖と展開： 共 選択の観点からの分析」『社会言語科学』21(1) 96-112
- 大塚容子 2018 「動画から顔の動きを抽出する試みー対話解析・修学行動評価の適用を目指してー」『教育システム情報学会第43回全国大会講演論文集』401-402

Shigemitsu Yuka 2017 “Question forms in male first meetings: A quantitative study of cultural norms in Japanese and English conversations” 東京工芸大学紀要 40(2) 25-34
Shigemitsu Yuka 2017 “Wh-(equivalent) questions of eliciting new information: A discourse analytical Approach to Japanese male first meetings” 東京工芸大学紀要 40(2) 49-58
岩田祐子 2016 「初対面会話におけるナラティブの評価：聞き手の評価の日・英語対称研究」応用社会学研究 58 131-143
岩田祐子 2015 「英語会話におけるトピックの発展と聞き手の役割」 *Language Research Bulletin* 30 1-16.

〔雑誌論文〕(計 31 件)
〔学会発表〕(計 32 件)
〔図書〕(計 0 件)
〔産業財産権〕
出願状況(計 0 件)
取得状況(計 0 件)
〔その他〕
ホームページ等 なし

6. 研究組織

(1) 研究分担者

研究分担者氏名：村田泰美

ローマ字氏名： Murata Yasumi

所属研究機関名：名城大学

部局名： 外国語学部

職名： 教授

研究者番号(8桁): 70206340

研究分担者氏名：大塚容子

ローマ字氏名： Otsuka Yoko

所属研究機関名：岐阜聖徳学園大学

部局名：外国語学部

職名：教授

研究者番号(8桁): 10257545

研究分担者氏名：重光由加

ローマ字氏名： Shigemitsu Yuka

所属研究機関名：東京工芸大学

部局名：工学部

職名：教授

研究者番号(8桁): 80178780

研究分担者氏名：大谷麻美

ローマ字氏名： Otani Mami

所属研究機関名：京都女子大学

部局名：文学部

職名：准教授

研究者番号(8桁): 60435930

(2) 研究協力者 なし

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。